



特別区の社会教育

— 民主社会の基礎工事として —

前・東京大学法学部教授
杉並図書館長兼公民館長

安 井

郁

民主社会は一朝にして成るものではない。これを築きあげるためには、多年にわたる基礎工事が必要である。それは何ら人をひくことのない、きわめて地味な、そして根気のいる仕事である。社会教育は、かかる民主社会の基礎工事としてもつとも大切なものである。

私は二十数年来大学教育に従事してきたが、敗戦後の動揺と混乱のさなかに、民衆の悩みと苦しみを共にして、社会教育の必要をあらためて痛感し、まず地元の杉並区からこの仕事に着手した。この数年の体験を通して見ると、社会教育の困難はまことに想像以上のものである。教育技術の点においても、社会教育は大学教育以上の技術が必要とする場合が少くない。その一つの理由は、社会教育の場合には、大学教育の場合のように、教育の対象を特定の人々に限定することが必ずしもできないからである。

社会教育のなかでも、組織をもつ人々を対象とする教育は比較的にやさしい。たとえば、労働組合に属する人々にたいする

教育がそれである。この場合には、対象となる人々の間にある程度の共通性が認められる。社会教育のもつとも困難なのは、組織をもたぬ一般社会人を対象とする場合である。このような人々にたいする社会教育の場としては、地域社会においてほかにない。何らの組織をもたぬ人々は、各自の居住する地域社会において、社会教育を受ける機会をあたえられなければならない。東京都の特別区における社会教育は、この意味において特に重要なものである。

われわれは区という名称にとらわれて、ともすればその規模につき錯覚をおこしがちであるが、いま全国で六大都市を除けば、人口四十万以上の市は福岡のみである。仙台、札幌、広島等はいずれも三十万台であり、熊本や静岡は二十万台である。これらと比較すれば、大田区、世田谷区、杉並区のような四十万前後の人口をもつ特別区が、いかに大きな地域社会であるかが知られるであろう。他の特別区にしても、通常の地方都市に匹敵するものである。このような規模をもつ特別区において、社会教育はいまだそれにふさわしい程度にまで発達しているとはいえない。これをいかにして推進するかを、われわれはさらに真剣に考慮しなければならない。

二

特別区の子社会教育については、まずその施設が問題となる。戦災後の東京都の教育施設は、基本的な義務教育施設の復興から着手しなければならなかつた。その苦しい現実のなかで、社会教育施設の充実が遅れたのは、ある意味ではやむをえないものと認めなければならない。現在においても義務教育施設はいまだ完全ではないが、一時から見ればかなり復興した。いまはそれと平行して、社会教育施設の充実をはかるべきときである。この一二年來、各特別区においてこの方面に力が注がれはじめたのは、まことに喜ばしいことである。

われわれが一般区民の希望を聞くと、集會室を求める声が非常に多い。たとえば地域の婦人団体が講習会や懇談会を開こうとしても、手頃の会場がなかなか見当たらない。結局その附近の小学校か中学校ということになるが、これもいろいろの制約がある。この点の不便は、多くの人々の痛感しているところである。

この不便は、社会教育を行う側においても認められる。たとえば、教育委員会が主催して成人学校を開くとき、その会場にはこれまた小学校か中学校の教室を借用せざるをえない。しかし、特に小学校の場合など、その机や椅子の構造は何としても成人には無理である。私はこの数年杉並区で成人学校長の役を引受け、その実態をつぶさに眺めて、終日の勤労の後に成人学校で何かを学ぼうとする熱心な人々のために、適当な勉強の場所をつくりたいと心から念願するようになった。

昨秋完成した杉並公民館は、この点を考慮して設計されたものである。この公民館は講堂のほかに三つの集會室をもつている。これに隣接する図書館の一部を合せると、成人学校が開けるのである。もちろん成人学校専用とすれば、もつと適切な構造のものが考えられる。しかし現在の特別区の実情では、成人学校が専用の校舎をもつことは少し飛躍しすぎることになる。われわれは限られた予算の範囲内で、公民館としての一般的な役割を果すとともに、成人学校開催のときにはその教室に転用しうるような施設をつくらなければならない。これが堅実な考え方であり、その意図は区民にもよく理解されるであろう。

最近二三の特別区において公会堂の建設が問題となつてゐる。もし予算が許すならば、特別区が何千人を収容しうる大きな公会堂をもつことは望ましいことである。先に述べたような特別区の人口から見れば、それは決して不自然なことではない。しかし、そのような大きな公会堂を、一般区民が利用する機会は比較的に少い。一般区民の日常生活においてしばしば必要なのは、中小の集會室である。そして社会教育の立場からいえば、この種の集會室の利用価値はきわめて大きいものがある。

私の意見を卒直に述べることを許されるならば、大きな公会堂は必ずしも各特別区が無理をしてつくる必要はなく、いくつ

かの隣接区に共同のものをつくるだけでも事足りると思う。特別区はまず社会教育施設としての公民館に力をそそぎ、できるならば区内の各所にいくつかの小さな公民館をつくるべきである。公民館はあまり遠くないところにあつて、気軽に出かけてゆけるものでなければならぬ。それでこそ公民館は民衆のものとなり、ひろく民衆に親しまれる。このような公民館は、壯麗な公会堂に比較すれば、まことに地味な存在であり、その設立者の功績を華々しく世に示すことはないかもしれない。しかしこの人目につかぬところにこそ、社会教育に従事する者の常に歩むべき本道があるのではなからうか。

三

公民館を中心として行われる社会教育活動はさまざまであるが、ここに最近における私の体験の一つを記しておきたい。私は婦人の会合にまねかれて講演をすることがしばしばあるが、かねてから婦人にたいして講演よりも一步を進めた社会教育を試みたいと考えていた。それは婦人の読書指導である。それでこのたび杉並公民館ができた機会に、その講座室を使つて婦人の読書会を開いてみた。

このきびしい時代に、婦人は社会の動きに無関心でいられない。婦人もまた社会人としての立場から、常に世界情勢に目を注ぎ、政治や経済の問題をつきつめて考えなければならぬ。そのうえに、婦人は母としての立場から、この時代になやむ子供たちのよき相談相手とならなければならぬ。

このような立場にある婦人のために、私は読書会のテキストとしてまずE・H・カーの「新しい社会」をえらんだ。カーは今年六十二歳になる英国人である。大学を出てから二十年間は外交官として過したが、その後は大学教授として国際政治の研究と教育に従事し、その名声はいまや世界的に確立している。

一般に英国人は常識的であり、穩健中正であるが、カーはその典型といつてよい。カーがその学問の根底においているのは「ユートピアとリアリティとの均衡」ということである。われわれの言葉でやさしくいえば、「夢と現実とのつりあい」というところであろうか。このような根底のうえにうちたてられたカーの学問は、きわめて健全なものである。「新しい社会」という書物は六回の連続放送をまとめたものであるが、そのなかでカーは現代がどのような時代であるかを説きつくしている。歴史の大きな流れはどこまで進んできているのか、また、万人に自由と幸福をもたらす新しい社会はどうしてつくられるのか、——われわれの当面するこれらの問題の解決について、カーのこの書物は示唆するところが少くない。

二つの世界の対立についても、カーはかたよつた見方をしていない。アメリカにたいしても、ソ連にたいしても、カーは公正な批判を加えている。このような態度で書かれた書物をじっくり勉強するとき、人をただちに「赤」とののしつたり、「反动」と呼ばわつたりすることの、いかに輕薄なものであるかがよく理解されるであろう。社会教育は、人々をあるいは右に、あるいは左に駈りたてるものであつてはならない。社会教育の重要な目的は、眞実を見抜く眼と公正に判断する力を人々に養わせることである。

カーの「新しい社会」をテキストとして読書会を開いてみて、私は婦人たちの眞剣さにつよく心を打たれた。集つたのは何々女史と呼ばれるような人々ではなく、また特殊のグループに属する人々でもなく、その多くは普通の家庭の主婦であるが、眞実を求めてやまぬはげしい気持は参加者の態度にはつきりあらわれていた。テキストの一章づつを研究する読書会は、最初は定員三十人から出発したが、二回目は五十人に、三回目は七十人に定員を引上げなければならなかつた。これは読書会として適当な限度をすでに超えるものである。

これだけの主婦たちがカーを勉強しはじめたということは、ささやかな事実のようではあるけれども、きわめて重要な変化

を象徴するものである。社会教育の新しい道を切り拓こうと苦闘している者に、この事實は未来にたいする希望と勇氣をあたえる。「新しい社会」一冊をしつかり読みあげるだけでも、かならず婦人たちに新しい視野がひらけるにちがいない。しかし科学書になれない婦人にとつては、最初の困難はたいへんなものである。そこで挫けることなく、難関を切り抜けるためには適切な助力が絶対に必要である。それがなければ、せつかく伸びはじめた若芽も枯れてしまふであらう。これは婦人の読書会のみならず、一般社会人の読書指導についてもいえることである。各地在住の文化人がこの役割——面倒ではあるが意義深い役割——を引受けて、地元の読書会のよき助力者となられることを、私は切に望んでやまない。

四

右の読書会のテキストにえらんだ「新しい社会」のなかで、カーは歴史の流れをさかのぼつて産業革命のことにも触れている。いままでこの種の問題を勉強しなかつた婦人たちにとつては、産業革命とはどんなものかということも必ずしも明らかではない。これを私が読書会の人に解説するのはやさしいことである。しかし私はあえてそのような方法をとらず、これについて次のように述べた。

「もしテキストのなかの産業革命というような言葉がわからない場合には、皆さんは私に質問されてもよろしいが、なるべく自分でそれを調べてください。それは質問より骨が折れますが、その代りにそれによつてえた知識は身につくのです。

一つの方法は、百科事典を引くことです。カーの書物をどう読むべきかというようなことは、もちろん百科事典に書いてありませんから、それがわからなければ私が解説するほかありませんが、産業革命というような言葉なら、百科事典に簡潔な解説があります。もし自宅に百科事典がなければ、読書会のはじまる前にちよつと隣の図書館へ立ち寄つて、百科事典を借りて

ください。そのために公共図書館があるのです。このことに限らず、ぜひ百科事典を手軽に引いてみる習慣をつけてください。

もう一つ、これはもつと身近な方法です。私は、読書会の準備をしていたときに、いま高校一年生の長女に産業革命のことをたずねてみました。長女のもつてきた社会科学の教科書には、産業革命についての実にみごとに解説がありました。皆さんもお子さんにたずねてみてください。家庭における楽しいまどいのひとつに、母と子が産業革命について語りあうというようなことも、ときにはあつてよろしいではありませんか。」

ある人々にはわかりきつているこのようなことを諄々と説くことが、社会教育においては必ずしも無用のわざではない。そのなかで、私は公共図書館のことに触れた。この公共図書館も、特別区の社会教育施設として今後ますます充実さるべきものである。先の読書会にもあらわれているように、いまや真実を求めてやまぬ人々の間では、読書熱がようやく高まりつつある。しかし一般家庭が多くの蔵書をそなえることは容易でなく、また家庭労働に追われている主婦などが遠くの図書館まで出かけることは困難である。ここに各地域に設けられる公共図書館の役割がある。先の公民館の場合と同じく、公共図書館も、広い特別区に大きなもの一つだけつくるよりも、各所にいくつかをつくるのが望ましい。主婦が買物のついでにちよつと立ち寄れるようなところに、公共図書館の真の在り方があるのではなからうか。民衆のための図書館は、決して重苦しい、いかめしい感じのものであつてはならない。

杉並図書館には、一般室のほかに、学習室を設けてみたが、学習室は特に中学生や高校生の利用が多くて、たいへんな盛況である。学習室を埋めつくした若い世代の人々が熱心に読書する姿は、見ていても気持がよい。適当な勉学の場所に恵まれないう中学生や高校生のために、公共図書館が便宜をはかるのは必要なことである。しかし公共図書館の本来の使命からみて、この仕事にはおのずから限界がある。

私は杉並図書館の運営にあたるようになってから、学校図書館を充実する必要をあらためて痛感した。講演等のために各学校を訪れるとき、私はその図書館を見学するのを常としているが、いまだ図書館のないところもあり、あつてもその内容はきわめて貧弱である。ときには学校当局やPTA等の関係者の努力によつて、図書館が立派に整備されていることもあるが、そのような例は稀である。各学校はぜひともその図書館の施設を改善し、辞典その他の基本図書や参考書を備えつけて、学生が普通の学習のためには公共図書館に行かずとも事足りるようにしなければならぬ。

懸案の学校図書館法もようやく制定され、今年四月から施行されようとしている。いまこそ学校図書館の充実に向つて大きな一歩を進めるべきときである。学校図書館法の第四条一項五号には、学校図書館が「他の学校図書館、図書館、博物館、公民館等と緊密に連絡し、及び協力すること」が規定され、また同条二項には、「学校図書館は、その目的を達成するのに支障のない限度において、一般公衆に利用させることができる」と規定されている。各地域社会に多くの公共図書館をつくることが困難な現状において、学校図書館がそれを補充する役割をつとめ、学校図書館と公共図書館や公民館との間の緊密な連絡と協力のもとに、学校教育及び社会教育が平行して進められるのはきわめて適切なことである。近い将来に特別区が学校図書館の問題を採りあげるにあつて、このような考慮が十分に払われることを私は期待している。

五

以上に述べたのは、特別区における社会教育の一端にすぎない。このほかにも、広い分野にわたる社会教育活動が考えられる。これを推進してゆくについては、特別区の理事者と区内在住の文化人の協力が必要である。この点について、ときに区政にたいする文化人の無関心が問題とされることがある。文化区と称せられる特別区においても、それは「文化人の寢床」にす

ぎないというような、手きびしい批判の言葉が投げかけられたことがあつた。文化人は居住区へ戻りに帰るだけであり、その活動はもつぱら中央で行われるという意味である。現在においても、この言葉はある程度まで特別区の実相を示すものといえるであろう。この状態を打破するためには、特別区の理事者と文化人の双方からの真剣な努力が要望される。

理事者の側においては、文化人の協力を求めるについて積極的に努力しなければならぬ。特別区の社会教育に協力する意思をもつ文化人でも、その活動の手がかりがないために表面に出ないことがある。理事者はそれらの人々に機会をあたえなければならぬ。高木杉並区長が常にいうように、「文化人の活動の舞台を準備するのは、理事者の役割」である。

文化人の側においても、特別区の理事者から協力を求められたときはもとよりのこと、そうでなくとも進んで特別区の社会教育にその貴重な時間の一部を捧ぐべきである。中央における華やかな活動に比較すれば、地域社会の社会教育はあまりにも地味な、そして報いられることの少い仕事である。しかしこの基礎工事を根気よく進めることなしに、立派な民主社会を築きあげることはできないことは、最初に記した通りである。

終りに社会教育に従事する者の態度について一言しておきたい。社会教育に従事する者が、もし高い講壇から深遠な理論を民衆に教えてやるというような傲慢な態度でこれに臨むならば、とうてい目的を達成することはできないであろう。すべての教育がそうであるが、特に社会教育においては、民衆とともに学ぶという謙虚な態度が必要である。これは単なるポーズの問題ではなく、学問と教育の在り方の根本に関することである。この在り方を誤るとき、いかに立派な言葉で飾られた学問や教育も、民衆を心から感動させることはできない。著名な大学教授が必ずしも優れた社会教育者でない一つの理由はここにあり。社会教育の場において民衆とともに学ぶ者は、その切実な体験を通して、学問と教育の正しい在り方を身につけることができる。これこそ社会教育に従事する者にあたえられる最高の報酬といえるであろう。

(杉並図書館にて、一九五四年一月二十五日稿了)